公益社団法人
京都市獣医師会

第7回 京都動物フォーラム 2016

人と動物が共生できる街「京都」をめざして

3/6 2016 日

会場 京都府立総合福祉会館（ハートピア京都）3F

時間 12:00～16:30（開場 11:30～）

総合司会
谷口キヨコさん
ラジオDJ・タレント
（愛称）キヨピー

第1部 13:15～14:00

なんでもアレルギーでは無いですよ！
犬アトピー性皮膚炎を中心に色々な皮膚病の話

日本獣医皮膚科学会認定医 京都市南区 ゆう動物病院院長　森本 真一郎 先生
日本全薬工業株式会社 営業推進本部CA事業部 関西事業副所長　二村 博 氏

第2部 14:25～15:10

京都動物愛護センター＆京都夜間動物救急センターの現状とこれから

京都市獣医師会会長　森 尚志 先生
京都動物愛護センター 相談係長 獣医師　伊東 大輔 先生
聞き手／谷口 キヨコ 氏（司会）

第3部 15:35～16:20

ちょっと待って！その症状、本当に年のせい？
～神経の病気をヒントに考える～

Kyoto AR 獣医神経病センター，日本動物高度医療センター 中本 裕也 先生

主催：公益社団法人 京都市獣医師会（http://www.kyoto-shiju.or.jp/）
後援：京都府、京都市、（公社）日本獣医師会、（公財）関西盲導犬協会、京都新聞、KBS京都、エフエム京都

第1部
13:15
〜
14:00

なんでもアレルギーでは無いですよ！

犬アトピー性皮膚炎を中心に色々な皮膚病の話

日本獣医皮膚科学会認定医
京都市南区 ゆう動物病院院長
森本 真一郎 先生

日本全薬工業株式会社
営業推進本部CA事業部
関西事業副所長
二村 博 氏

はじめに

動物病院に来院する病気の犬で、皮膚病が理由の子は全体の約２６％と言われ、耳の病気や腫瘍を含めれば約40％近くにもなります。またその皮膚病の中で犬では30〜40％、猫では30％弱がいわゆるアレルギーと言われます。(動物健康保険アニコム調べ)

この多い病気に関して、獣医師がどの様に診察し診断し、治療するのか？様々な写真をお見せしながら、一番多くて関心の高い犬のアトピー性皮膚炎を中心に珍しい病気まで、基本的な事から最新情報までを交えてお伝えしたいと思います。

犬猫の皮膚病は同じなんでしょうか？その内訳は？

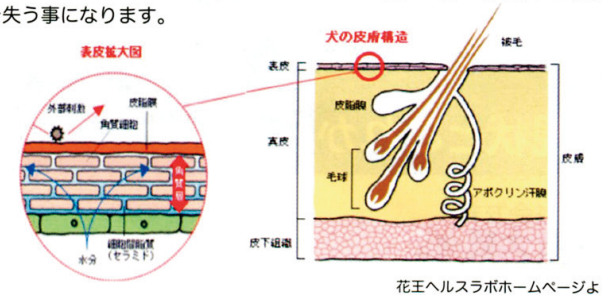
詳細に統計を読むと先ほどの皮膚病の分類は、犬と猫で違うのですが、病名の上位３位には似た感じのものが並んでいます。アトピー性皮膚炎・アレルギー性皮膚炎・アレルギー・アトピーを除く皮膚炎です。しかし、これらは結構ゴチャゴチャになっていると思われます。更に同じ病名の話でも、人での話と犬猫の違いでもっとゴチャゴチャになって訳が分からなくなっています。その辺りからお話をしたいと思います。まずは基礎的な事から書きます。

アレルギーの理解の為に：免疫・抗体の働きって？アレルギー反応って？

免疫とは「身体を守る為に、自分以外の異物(ガン細胞など変質した自分自身を含む)を排除する様に働くシステム」の事です。抗体は「その際に作られ、特定の抗原(アレルゲン)に特異的に結合して、その異物を生体内から除去する分子」です。アレルギー反応(過敏性反応)とは、「通常は無害な物質に対して免疫システムが異常な反応をすること」です。

皮膚のバリア機能って？

皮膚は最外層に表皮があり薄いですが強力なバリア機能を持ちます。そのバリア機能により外部からの感染源・物理的刺激・化学的刺激を防ぐと同時に、内部からの水分・電解質・蛋白質の流出を防ぎます。よって、そのバリア機能が低下した場合は、外界の様々なものの侵入を許し、内部から水分等を失う事になります。



花王ヘルスラボホームページより

犬の皮膚の特徴は？皮膚のバリア異常って？

犬は人よりも薄い表皮を持ち、肉球以外はアポクリン汗腺が無く人の様な汗をかかず、皮膚のＰＨは中性〜アルカリ性で人の弱酸性と異なり、表皮のターンオーバー(細胞の交代)も20日と人の28日よりも短いです。この為にアトピーで無くても細菌感染を起こし易くなっていると言われます。更にアトピーの犬では保湿に働くセラミドが減少し経表皮水分蒸発量が多くなり、表皮バリア機能の異常によりアレルゲンが侵入し易くなります。そして痒くて掻く事は更に皮膚のバリア機能を傷害し、炎症を起こす物質を増やし痒みを引き起こし、痒みを感じる神経線維も表皮側に伸びてきて、より過敏になり更に掻く･･･と言う悪循環に結び付くと言われます。

人と犬と猫でのアトピー性皮膚炎とアレルギー性皮膚炎の定義・考え方の違い

まず人の場合はどうなっているのでしょう？日本皮膚科学会では、アトピー性皮膚炎とは「増悪・寛解を繰り返す、かゆみのある湿疹を主病変とする慢性に経過する疾患であり、患者の多くはアトピー素因をもつ」としています。現在では「必ずしもアトピー性皮膚炎の原因は免疫が関係したアレルギーだけで無く、皮膚のバリア機構と、それに付随する色々な反応が原因になっている」と言う考えが診断にも治療にも非常に大事になっています。

では犬はどうなっているのでしょう？犬の場合は犬アトピー性皮膚炎国際調査委員会が「特徴的な臨床徴候を伴う、遺伝的素因による炎症性掻痒性アレルギー疾患であり、その臨床徴候が主に環境アレルゲンに対するＩｇＥに関連するものを指す」と定義しました。よって、基本的には「犬のアトピー性皮膚炎は抗体によるアレルギーである」となります。ですのでアレルギーが証明できない場合は「犬アトピー様皮膚炎」と呼ぶ事になります。何だか面倒な事になっていますね･･･。とりあえず実際の臨床ではヒトに合わせて、免疫も大事だが皮膚バリア機能も凄く大事だと考える事が主流になっています。

猫はどうなっているのでしょう？猫については良く分かって無いので、アトピー性皮膚炎と呼ばない方が良いとの話すらあります。「過敏性皮膚炎」と呼んだり、除外診断の結果から「非ノミ非食事性アレルギー」と呼んだりもします。要するにあまり良く分かって無いので定義もイマイチ確かで無いと思って下さい。

もちろん定義や考え方は異論も有りますし、これからも変わっていくでしょうが、要するに現時点では「人ではアトピー性皮膚炎には必ずしも免疫(アレルギー)が関係して無く、皮膚のバリア機能の問題が大切だと言われる様になってきている。犬でも定義上はアトピー性皮膚炎と呼べないアレルギーの関係無いアトピー様皮膚炎の場合も含め、人と同じく捉え方をする傾向にある。猫ではアトピー性皮膚炎の存在や定義から、まだ議論段階である」と考えて頂けると良いと思います。

犬のアトピー性皮膚炎の診断目安

2010年に世界的に皮膚科で有名なFarvot先生が統計的な事実からも導いた基準を幾つか提示して下さいました。ただしこれには原著に大きな誤りがあって、実は混乱があります･･･ですので、ひとまず下の基準を目安に考えて下さい。

①発症年齢が3歳未満
②大半を室内で過ごす
③発症時に皮膚病変を伴わない掻痒がある
　または、慢性または反復性の真菌(マラセチア)感染がある
④肢端(前肢)に病変がある
⑤耳介に病変がある
⑥耳介辺縁には病変が無い
⑦腰背部には病変が無い
⑧ステロイドに反応する

以上のどれか５つを満たせば大体約80％、6つで約90％でアトピー性皮膚炎を疑います。

僕達獣医師の実際の診断ではこれらの基準に沿って診断される事が基本ですが、それが本講演の進行の流れと似たような感じになると思って下さい。

猫ではアトピー・アレルギーはどう考えるのか？

猫でも基本は同様の流れです。まずは菌や真菌、更に疥癬ダニ・蚊・ノミ等の寄生虫感染をそのアレルギーを含め除外します。時には試験的投薬が必要です。食物アレルギー（不耐性）は除去食を6〜8週以上根気よくしっかりと行う事で除外します。基本的に最終的に残った疾患はアトピー性皮膚炎を疑いますが、猫でも心因性の事もありますし、他の珍しい疾患の場合もあります。犬と同様にFarvot先生が診断基準を提示してくれていますが、こちらは煩雑で、あまり実用的では有りません。原因が違っても症状としては好酸球性肉芽腫性群と呼ばれる独特な症状で同じだったりして、原因の推定は犬より困難な場合があります。

「人は見た目が９割」と言う本が有りましたが、皮膚病は見て分かるものでしょうか？

皆さんは一見してどうでしょう？分からないですね。僕達獣医には見た目である程度怪しい病気が思い浮かぶものもありますが、逆にそれで惑わされる事もあります。結局全部が見ただけでは診断できないので、まずは問診からしっかりとしていく事になります。

見て分からない場合、何を聞きかれるでしょう？

まずは痒いか、痒く無いか？かゆくなければアレルギーは基本的に除外です。

痒い場合は、□どの位か？
□いつからか？
□どこか？
□どんな時か？
□周囲の人や同居動物は痒くないか？

など、詳しく聞いていくので来院時に教えて下さい。それで病気の見当がつく事もあります。でも逆に基本的に痒く無い病気でも二次的な感染で痒くなってしまう事もあります。

実は先ほどお見せした皮膚病には痒く無い特徴的な疾患も入っていました。

次に寄生虫感染を除外する事が大切です。

寄生虫としてはノミ・疥癬ダニ・ツメダニ・毛包虫の感染が多いです。

皮膚病を発症して来院する前に、これらにアレルギーを発症する予防も含めて、普段から予防できる寄生虫は確実に予防しておきたいところです（現在、毛包虫だけは海外の予防薬でないと有効では有りません）。とにかく予防を最初からして頂いていると非常に助かります。今は色んな便利な予防薬があるので、代表的な製品もご紹介します。

先程の写真では何が感染症だったのでしょう？実は特徴的なものもありますよ。

更に寄生虫じゃない感染を除外すると言えば・・・？

細菌や真菌（マラセチア・糸状菌）は先ほどお話した痒く無い脱毛症でも二次感染で痒みを出してしまう事もあります。また、他の重篤な病気が背後にあって、発症する事もあります。菌が居たら抗菌剤、真菌が居たら抗真菌薬と言うだけでなく、原因を考えた総合的診断と治療が必要になる事もあります。内服は指示通りしっかりと飲む必要が有ります（膿皮症なら基本的に2~3週）。最近は耐性菌が動物でも問題になっているので、薬を指示通り飲む事は人の為にも大切です。効かない場合は培養検査等で薬の種類を選ぶ必要がある事も有ります。また耐性菌対策としては内服だけでなく外用療法をしっかりと使用する事も大切になります。膿皮症も基礎疾患が大切になるものがあります。

感染を除外した上でやっぱり痒みが残るならアトピー性皮膚炎（アレルギー）の疑いがあります。

2015年に改定になった世界的な犬アトピー性皮膚炎の標準療法を紹介します。犬を中心として、その中から急性期と慢性期の治療・再発予防を以下に基づいて色々とお話します。

□ステロイド→外用と内用
□抗ヒスタミン剤
□他の免疫抑制剤（シクロスポリン）
□分子標的薬（アポキル）
□インターフェロン療法
□減感作療法
（薄めた抗原等を打つ事で段々と身体を慣れさせる療法）
□環境変更
□食事変更・サプリメント
□スキンケア

大事なのは「基本的には治らないけれども、コントロールはできる病気」として複合的に色んな手を使って、獣医さんと一緒に病気と付き合っていくという姿勢です。

多くの人が気になるのは・・・？

＊ステロイドって安全なのだろうか？必要なのでしょうか？
＊ステロイドの他に治療方法は？
＊うちの子は食事からじゃないかしら・・・？
＊環境を変えるってどうしたら？
＊シャンプーを含めたスキンケアは適切にできているんだろうか？

・・・と言った事が多いと思います。それらについてもお話をしようと思っています。

「あれ？じゃあ感染を気を付けて、上手にステロイドを使って、可能なら食事を変えて、上手に洗ってたら良いのかな？」と、思われましたか？

確かにそうです。ですが、困った事に難治症例は沢山あります。アトピー・アレルギーそのものも困る場合があるのですが、今回は甘く見ていたら怖い症例・大変な症例を３パターン紹介して、動物病院で適切に診断して貰う大切さをお伝えしたいと思います。

①ステロイドがとんでもなく沢山必要です！
＊落葉状天疱瘡　＊スィーツ病　＊壊死性血管炎
②ステロイドでは基本的に無理です！
＊脂腺炎　＊皮膚型リンパ腫　＊心因性？
③ステロイドをしたら悪化して、死ぬかも知れません・・・。
＊甲状腺機能低下症
＊副腎皮質機能亢進症（医原性クッシングを含む）
＊リーシュマニア（下手したら人間も死ぬかも・・・）

最後に大事な事を３つ書きます！

1.まず予防ができる事はきちんと予防しよう！
2.見た目で判断しないで、きちんと病院で診断を受けよう！
3.完治しない病気でもよく相談し、
一緒に色んな手で改善を目指しましょう！

以上です。今回の講演が少しでも皆様のお役に立てると幸いです。